

< 学会印象記 > 第60回日本心理学会 / 第43回日本小児保健学会 / 第5回日本LD学会

著者	山中 克夫, 広瀬 幸美, 福田 哲治
著者別名	Yamanaka Katsuo, Hirose Yukimi, Fukuda Tetsuji
雑誌名	筑波大学リハビリテーション研究
巻	6
号	1
ページ	74-75
発行年	1997-03-29
URL	http://hdl.handle.net/2241/10817

〔学会印象記〕

第60回日本心理学会

常にわが国の心理学研究のリーダーシップ的存在であり続ける日本心理学会も、本年、60回目の総会を迎えた。今回の主催は立教大学であり、平成8年9月10日から12日までの3日間で、口頭228件、ポスター760件、ワークショップ37件の演題が発表された。

私自身は、ワークショップ「記憶障害への認知心理学的アプローチ」(本学心理学系、太田信夫教授企画)に「痴呆の病期の進行とともに現実認識は過去に遡るのか?」というテーマで、ポスター(情動・動機づけ部門)で「在宅老人家族介護者のコーピングスタイルとソーシャルサポート」という演題で発表させていただいた。また、常日頃悩み続けている「痴呆のリハビリはどんなことをすればいいのだろうか?」という疑問を第一線の臨床家、研究者の方に晴らしていただきたいという気持ちで「神経心理学的視点からみた老年期」に参加させていただいた。紙面の都合上、ワークショップに参加した感想だけ述べていただく。

「記憶障害への認知心理学的アプローチ」では、他に、福岡教育大学の渡部信一氏、上越教育大学の恵羅

修吉氏がそれぞれ、失語、健忘の症例をもとに、記憶研究の現在の問題点をお話しくださった。すべての演者に共通していた意見は、「既成(トップダウン型)の記憶モデルでは、それぞれの患者の症状を説明しきれない」という点であった。換言すれば、患者のさらなる観察、働きかけにより、ボトムアップ型のモデルを再構築すべきであるということになる。失語の分野では患者の観察から発展したモデルが多いが、記憶障害では、健常者に対して行った仮説検証実験から生じたモデルをそのまま患者に当てはめた研究が大半を占めている気がする。また、評価や治療が、常に患者の人生にとってどんな意味を持つのか考えなければならぬ時代が到来していることも発表者の意見の一致するところであった。特に恵羅氏の「患者を通して、脳の局在に関する論文を書かせてもらったのだから、その患者にお返しをしていかなきゃならない。私は30年間ぐらいかけてお返しをしていくつもりだ。」という言葉は胸に深く刻まれた。

(筑波大学心身障害学系 山中克夫)

第43回日本小児保健学会

第43回日本小児保健学会は、平成8年9月26~27日の2日間、小宮弘毅会頭(神奈川県立がんセンター所長・前神奈川県立こども医療センター所長)のもと、横浜市のパシフィコ横浜を会場に開催された。

1日目は「障害児の保健」に焦点をあて、特別講演や招待講演のほか教育講演4題およびシンポジウムが企画された。特にシンポジウムでは「障害を克服する医療の進歩」をテーマに医師以外、スポーツインストラクターによる「生活を豊かにするスポーツ」、親の会の代表による「親の立場から医療に期待するもの」という発表もあり、障害児のQOLの向上をめざそうとする本年の学会の姿勢が伺えた。また、招待講演はアメリカの有資格臨床ソーシャル・ワーカーのアドリアナ・タランタ女史の「患児をとりまく家族」であり、生命予後の悪い病気の子どもをもつ家族のためのサービスを医療チームが積極的に行っている実践は非常に

興味深かった。

第2日目には、342題の一般口演の発表が8会場で集中して行われた。発達発育、アレルギー、育児、栄養、肥満、新生児、心身障害、家族支援といった領域の演題が多く、近年の子どもの問題を反映していた。また災害という領域では、昨年の阪神・淡路大震災関連で6題出されており、子ども健康問題の課題の多彩さ・複雑さを改めて実感した。

以上の学会日程の他に、学会の前日にはプレコンGRES・シンポジウム(学習セッション)が「長期療育のこども達を支えて」というテーマで開催された。日々障害児とかかわっているコ・メディカルスタッフの発表であり、VTRや写真、CDを取り入れた効果的なプレゼンテーションもあって、日頃の実践と障害児への思いが伝わってきてとても印象に残る学会だった。

(神奈川県立衛生短期大学 広瀬幸美)

第5回日本LD学会

平成8年10月5日・6日の2日間にわたり、日本LD学会が白百合女子大学を会場にして開催された。木立の中に校舎やチャペルが散在するキャンパスの優雅さにまず感心する。

初日の午前中はポスター発表である。大学の研究者や臨床センター、教育研究所、病院などからの発表にくわえて通級指導学級など教育現場からの報告も目を引いた。学際的な研究の分野だけに、発表の内容も神経学から教育、社会的な援助システムまでと多彩である。午後は、東洋先生とアメリカから招待した Doris Johnson 先生の講演会がそれぞれあった。東先生は、文部省のLDの定義では付帯的に扱われているLD児の社会性の問題の重要性を、ご自分の経験を交えながらやわらかくご指摘になった。Johnson先生は、MyklebustとともにLD研究の草分け的存在として知られている。そのお二人の著書を今回の大会実行委員長の森永良子先生らが翻訳なされたのが、わが国におけるLD研究が一般に広まる契機となったことを考えると、今回の来日は大変意義深い。そのJohnson先

生は、長年の臨床経験から、年長のLD者のかかえる問題を事例を交えて報告された。LDが単に学童期の問題ではなく、生涯にわたる問題であることを改めて認識させられた。

2日目は、口頭発表と様々なシンポジウムがもたれた。なぜか今回の口頭発表は、医療の立場からの報告が多かった。研究のレベルや方法論が異なるためとは思うが、LD児の理解が通常の学級の先生方にもひろまるためには、教育に関する報告がもっとあって欲しいと感じた。その点、シンポジウムの方では、LDの治療教育へのチームアプローチがとりあげられ、教育の立場から、専門家との連携の必要性を指摘する声があった。また、親の会の自主シンポでは、青年期を迎えたLD者自身がそれぞれの思いを語るなど、キャンパスの静かなたたずまいとは裏腹に、熱気のこもった討論が印象的であった。

(筑波大学教育研究科リハビリテーションコース
福田哲治)